

1．研究課題名

「渡り鳥によるウエストナイル熱及び血液原虫の感染ルート解明とリスク評価に関する研究」

2．研究代表者氏名及び所属

桑名 貴 ((独) 国立環境研究所)



3．研究実施期間

平成 18 年度～20 年度

4．研究の趣旨・概要

鳥インフルエンザの主たる感染ルートはガン・カモ類であると認識されている。しかし、我が国への侵入が懸念され、鳥類種の大量死の原因となるウエストナイル熱や鳥類血液原虫の感染ルート解明のためには、むしろガン・カモ類以外のシギ・チドリ類の疫学的調査を行うことが重要である。シギ・チドリ類はガン・カモ類と比べ、より長距離を渡り、その個体数はガン・カモ類より遙かに多いため、ウエストナイル熱や鳥類血液原虫の感染源となる危険性が非常に高い。そのため、シギ・チドリ類の調査を行うことが、その渡りの中継地域に棲息する鳥類を始めとした生物多様性を保全するための緊急の課題である。更に、国内で最初に感染する可能性が高い鳥類種でのリスク評価のためにもモデル鳥類種(幾つかの絶滅危惧鳥類)での感染調査を行うことが緊急の課題である。

具体的には地球規模で渡りを行うシギ・チドリ類を対象に、ウエストナイル熱と血液原虫症の疫学調査及び、これらの病原体を媒介する吸血昆虫の調査を、繁殖地(シベリア地域)と越冬地(東南アジア)で行い、加えて渡りにおける重要な中継地(北海道風連湖および沖縄県漫湖)で実施するとともに、これらの感染症が国内に入る際に最初に感染する可能性が高い鳥類のモデルとして絶滅危惧鳥類(シマフクロウ、オジロワシ、タンチョウ、ヤンバルクイナ)での感染リスク評価を行う。

上記のように、地球を南北に半周する渡りをするシギ、チドリ類を対象にした感染病原体のモニタリング体制とマニュアル整備により、関係する国々の診断方法が標準化されモニタリング情報を共有しやすくなる。これにより、渡りのルートに沿った国内及び海外における野生鳥類の大量死の発生を事前に警告できる体制が確立するために、国内の絶滅危惧野生鳥類の保全、及び希少鳥類の生息域内外保全に貢献することができる。

5．研究項目及び実施体制

渡り鳥(シギ、チドリ類)における病原体感染に関する研究((独) 国立環境研究所)

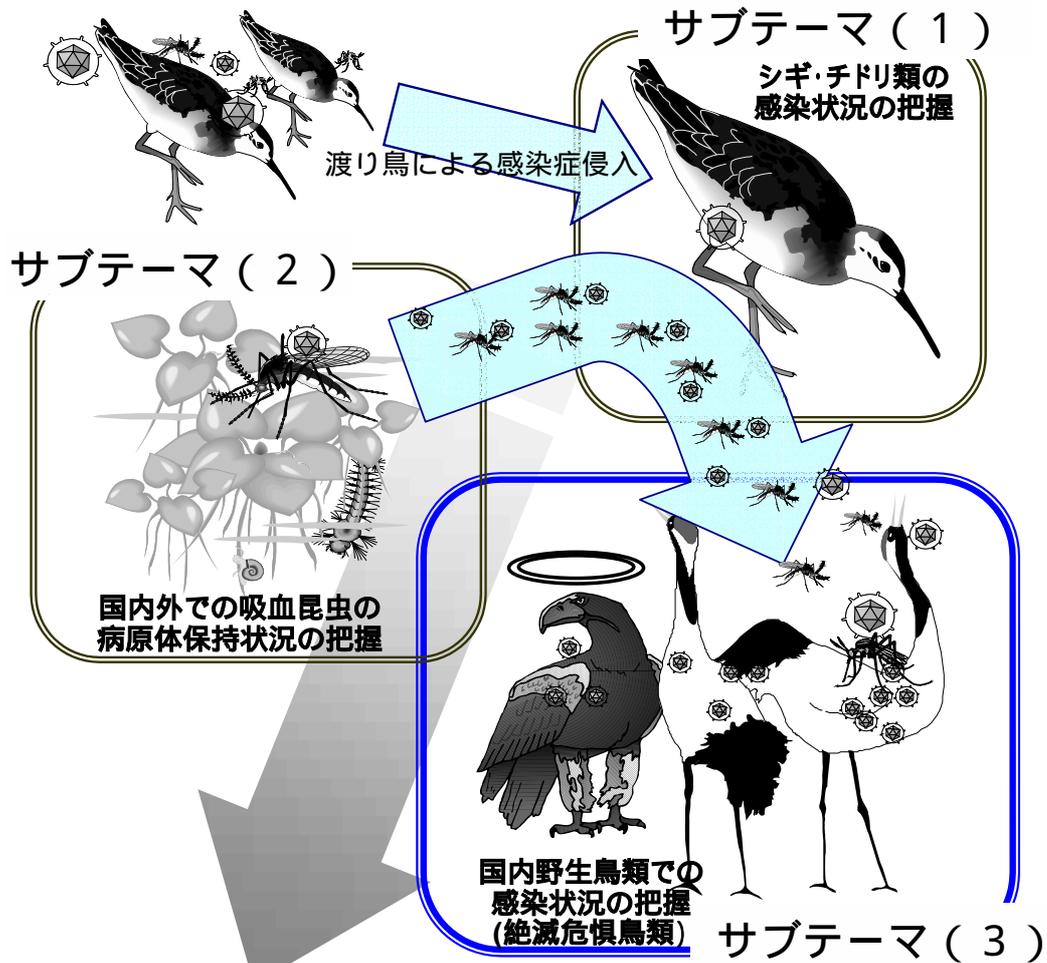
吸血昆虫における病原体のモニタリング調査に関する研究

(日本大学生物資源科学部)

絶滅危惧鳥類を用いた病原体感染リスクの評価に関する研究

(酪農学園大学野生動物医学センター)

6. 研究のイメージ



野生鳥類大量死警戒システムの開発

モニタリング手法の標準化

地球環境行政への貢献

診断方法の標準化により関係各国間でのモニタリング情報共有
国内外での野生鳥類大量死発生の事前警告体制確立
希少鳥類の保全と生息域内外保全に貢献